

IPFC と中間言語としての現代フランス語研究

近藤 野里、川口 裕司

はじめに

本稿では、筆者たちが 20028 年度より開始した国際プロジェクト「現代フランス語の中間音韻論」Interphonologie du français contemporain (以下では IPFC と略)の研究目的と研究内容を概説する。本プロジェクトは、「現代フランス語の音韻論」Phonologie du français contemporain (以下では PFC と略)における「PFC フランス語教育」PFC Enseignement du français 部門に関連するプロジェクトとして、東京外国語大学と PFC との共同プロジェクトである。

IPFC の構想は、2006 年 12 月 9 日に、パリの Maison des Sciences de l'Homme で開催された Journée PFC において、川口が“Projet de UBLI et la phonologie du français chez les apprenants japonais”と題する中間音韻論に関する発表を、またシルヴァン・ドゥテ氏 Sylvain Detey (Dyalang ルーアン大学)とドミニク・ヌヴォ女史 Dominique Nouveau (ナイメーヘン大学)が、“PFC pour l'enseignement du français”と題する発表を行った時点に遡る。¹ ドゥテ氏がその前年度まで東京外国語大学で非常勤講師を勤めていたこともあり、共同研究プロジェクトの構想は Journée PFC の中で自然に持ち上がった。学習者言語の専門家である Detey 氏は、共同研究プロジェクトの素案作りを引き受けた。一方で、後述するオープンソースの e-learning システムである Moodle を 2005 年度から授業に導入していた川口は、Moodle による学習者言語コーパスを構築するためのシステムを実現するため、林俊成氏の協力を仰ぎつつ、後述する Moodle の利用法について話し合いを行った。

2007 年 7 月 5 日にはルーアン大学よりドゥテ氏を招き、「PFC コーパスの発音教育への応用」と題するワークショップを企画した。² その席上、PFC が収集し構築した話し言葉フランス語コーパスを、本学で行う最適化教育プログラムにどのように活用

¹ 川口の PDF 版は、http://www.projet-pfc.net/?u_act=download&dfile=kawaguchi061209.pdf&、Detey et Nouveau の PDF 版は、http://www.projet-pfc.net/?u_act=download&dfile=PFC-EF_Lancement_Decembre06_Detey_Nouveau.pdf&をそれぞれ参照。

² ドゥテ氏の招聘に際しては、東京外国語大学の「世界の「言語・文化・地域」理解のための最適化教育プログラム」の援助を受けた。またワークショップは、平成19年度の文部科学省科学研究費補助金、基盤研究(A)「多言語話しことばコーパスと学習者言語コーパスに基づく言語運用の研究と教育への応用」(課題番号19202015、代表者 川口裕司)との共催であった。

することができるか、その可能性と問題点を討論するとともに、日本人フランス語学習者の言語コーパスを構築するための原案が提示された。

本稿で概説する IPFC プロジェクトは、その後の数回に渡る議論を経てまとめられたものである。³ しかしここではまず最初に、IPFC の親プロジェクトである PFC について、ごく簡単に説明しておいたほうが良いであろう。

PFC は 2002 年にフランスで始まった国際プロジェクトであり、⁴ その目的は以下の 5 つの目的を実現することである。

- ① 話し言葉フランス語がどのように単一性をもち、かつ多様性を有するのか、その正確な姿を提示すること、
- ② 共時態と通時態の両方について、音韻論モデルを検証すること、
- ③ 共通の方法論を用いて、話し言葉フランス語の大きなデータベースを構築すること、
- ④ 音韻論的な知識を相互に共有しつつ、自然言語処理のためのツール開発を促進すること、
- ⑤ フランス語教育とフランス語学のためのデータを拡大し、刷新すること、

である。

PFC を当初から主導してきたのは 3 人のフランス人研究者、ジャック・デュラン Jacques Durand (ERSS-UMR5610、トゥールーズ・ル・ミライユ大学)、シャンタル・リュック Chantal Lyche (オスロ大学)、ベルナール・ラックス Bernard Laks (MoDyCo、パリ 10 大学) である。2002 年のプロジェクトの開始後、多くの高等機関に所属する研究者、ポスドク、大学院生が参加している。⁵

IPFC プロジェクトは、PFC の研究目的の、主に②、③、⑤に関わる研究であると言うことができる。まず、それらの点をについて説明する。

³ なかでも 2008 年 5 月に本学が開催した国際シンポジウムにおいて、さらに同 7 月にパリで開催された CMLF (<http://www.ilf.cnrs.fr/spip.php?rubrique4>) の機会を利用してドゥテ氏と長時間に渡る話し合いを持つことができた。

⁴ <http://www.projet-pfc.net/>

⁵ たとえば <http://www.projet-pfc.net/?pfc-rc#> を参照。

1. 中間言語としての現代フランス語研究⁶

1.1. PFC

PFC についての「音韻論」は、通常よりも広い意味で用いられている。つまり、音声学は音韻論に付属する独立した研究分野とは考えずに、むしろ音声の領域における言語活動の認知構造を考察するための音韻論の補完的な分野と見なされている。⁷ また研究対象となる現代フランス語は、いわゆる規範化されたフランス語ではなく、音韻調査によって得られる実際の言語使用(usages)としてのフランス語である。PFC は4つのレジスターを含み、世界中の諸地域で使用されるフランス語をカバーするという目標をもつ。⁸ したがってPFC は、様々な地域と社会において実際に使用されている現代フランス語の変異にも関心を抱く。しかしそうしたフランス語の変種の研究は、必ずしもフランス語の記述を無意味に下位分化することにはならないと主張する。むしろPFC では、多様な言語使用の裏にこそ、一つの構造が存在していると考えるのである。音韻論と音声学と社会言語学が交るところにおいて、様々な変異を観察することによって不変的な構造を見つけようとする。⁹

1.2. IPFC

中間音韻論 *Interphonologie* という術語は、中間言語 *Interlangue* から派生した用語である。中間音韻論とは、主に、学習者が第二言語としてある言語を習得する際に、学習の様々な過程・段階における、学習者の音声的・音韻的特徴を理論的に研究する分野を意味する。

PFC プロジェクトでは、ヨーロッパにおいてフランス語を第一言語とする話者、カナダおよびルイジアナの二言語併用話者、さらにアフリカのフランス語圏における多言語併用話者が、日常生活の中で使用するフランス語を研究の対象とする。これに対して、IPFC プロジェクトでは、フランス語を母語としない話者を対象とし、一定の調査要項に従った音韻調査を行い、様々な学習レベル、そして様々な言語背景を持つ学習者のフランス語を音声学的かつ音韻論的に研究する。

こうした中間言語に関する研究は、とくに英語圏で盛んに行われており、¹⁰ 本ブ

⁶ 本稿における IPFC プロジェクトの概要は、同計画書(第4版) Sylvain Detey、Yuji Kawaguchi、2008 年 10 月 10 日作成に基づく。

⁷ Delais-Roussarie et Durand, 2003, p.214.

⁸ Ibid.

⁹ Ibid.

¹⁰ <http://leo.meikai.ac.jp/~tono/lcorpuslist.html> に掲載されている英語学習者の中間言語コーパスのリストを参照。同様に <http://www.univie.ac.at/voice/> と <http://www.uta.fi/laitokset/>

プロジェクトは、規模こそ違いはするものの、ベルギーの「ルーヴァン話し言葉英語中間言語の国際データベース」 Louvain International Database of Spoken English Interlanguage (ICLE)¹¹ に似た研究プロジェクトになるものと予想される。一方、フランス語について言えば、既に 2 つの大きな学習者言語コーパスが存在する。書きことばコーパスを対象とする「フランス語中間言語データベース」 French Interlanguage Database (FRIDA)¹² と、話しことばコーパスである「フランス語学習者口語言語コーパス」 French Learner Language Oral Corpora(以下では FFLOC と略)¹³ である。後者のコーパスは、イギリスの大学 1 年生から 4 年生の学生を対象にしており、学習者の言語能力レベルに合わせて、写真を見ながらの説明、会話、役割プレイ、語り、1 人の話者を対象とする録音、2 人の対話者を対象とする録音など、多様なタスクを用いたコーパスデザインを採用しており、その点で内容的に充実したコーパスである。

FLLOC のような既出のコーパス群に対して、本 IPFC プロジェクトは、以下の 5 つの独創的な面を持っていると言えよう。

- ① PFC のツールを利用し、話し言葉フランス語の統語的・語彙的情報を収集しながら、学習者の言語能力、とくに彼らの音声と音韻に焦点を定める。
- ② 諸地域の学習者データを比較することができるように、調査項目に一貫性を与える。
- ③ 既存の PFC データベースを参照することで、単一言語および多言語環境における言語変異を比較研究することが可能になる。
- ④ PFC で培われたネットワークを継承し、研究協力者の国際的なネットワークを構築する。
- ⑤ 中間音韻論としての研究的側面だけでなく、PFC 教育プロジェクト(以下では PFC-EF と略)¹⁴ としての教育的側面における探究も行う。

kielet/engf/research/elfa/ の英語のリンガフランカのコーパスを参照のこと。

¹¹ ICLE は S. Granger の指導のもとによって行われた更に大きなプロジェクト International Corpus of Learner English (ICLE)の一部を成している。

<http://www.fltr.ucl.ac.be/FLTR/GERM/ETAN/CECL/cecl.html> 参照。

¹² <http://www.fltr.ucl.ac.be/fltr/germ/etan/cecl/Cecl-Projects/Frida/frida.htm> 参照のこと。

¹³ <http://www.flloc.soton.ac.uk/> 参照のこと。

¹⁴ 以下の研究を参照のこと。A. Neri, C. Cucchiaroni et H. Strik (2006) (*Selecting segmental errors in non-native Dutch for optimal pronunciation training training*) は、異なる第一言語を持つオランダ語学習者の話し言葉分析をもとに、エラーの標本を作製した。このエラーとは、頻出し、知覚的にも目立ったもので、また長期に渡って続き、さらにコミュニケーションを潜在的に妨げ

1.3. IPFC の目的

次に IPFC の目的を簡単に述べておく。

研究的側面：

PFC の調査要項に基づく学習者言語コーパスを構築する。本コーパスは第二言語としてのフランス語の習得、さらには音声学および音韻論を研究対象とする言語学者、心理言語学者、教育者のために有益である。コーパスは調査対象となったフランス語学習者の集団に見られる特徴的な情報だけでなく、同時にそれらの学習者に普遍的に観察される傾向等も提供することができるであろう。また、本コーパスは、可能な限り、長期的な調査結果に基づく必要がある。

教育的側面：

本コーパスは PFC の調査データに統合され、それにより以下のような情報を提供することが可能であると言える。

- ・世界中のフランス語を第一言語としない話者によって話される口語フランス語に関する情報を学習者や教育者に提供できる。これにより学習者は多様な言語変異に習熟することができ、教育者は専門家育成のために活用できる。¹⁵
- ・フランス語学習者の発音データとしてだけでなく、典型的あるいは起こりうる誤りと、特徴的な誤りといった、フランス語習得の過程における困難に関する情報を、学習者と教育者に提供できる。

1.4. IPFC の研究内容

IPFC の調査地は、たとえば東京のような非フランス語圏における諸大学、さらにフランス語圏では、ジュネーブのアリアンス・フランセーズやジュネーブ大学の外国人向けフランス語講座等である。¹⁶

調査対象者となるフランス語学習者の言語能力レベルは、『外国語の学習、教授、

得るものである。

¹⁵ たとえば、S. Behrent (2007)の最近の著作にある communication interalloglotte の概念を参照のこと。

¹⁶ 研究協力者(予定) 非フランス語圏：日本(川口裕司)、オランダ(D. Nouveau)、ノルウェー(C. Lyche)、デンマーク(A. B. Hansen)、ドイツ(E. Pustka, T. Meisenburg, B. Lonnemann)、イタリア(E. Galazzi, C. Barone)、イギリス(P. Rowlett)、アメリカ合衆国(T. Klingler)、スペイン(L. Baque)、ポルトガル(E. d'Andrade)。フランス語圏：スイス(I. Racine)、フランス(S. Detey, J. Durand)、ベルギー(A.-C. Simon)

評価のためのヨーロッパ共通参照枠(*Cadre européen commun de référence pour les langues: CECRL*)』の 6 つのレベルを適用するものとする。これ以外にも、一定のフランス語能力を測定する資格試験、たとえば国際的なものとしては DELF、地域的なものとしては日本の実用フランス語技能検定試験なども、言語能力レベルの判定の参考になるであろう。調査では、それぞれの個人においてフランス語がどのような地位にあるか(第一外国語、第二外国語、または第三外国語等)、さらにフランス語を学習した期間の長さ等も調査しなければならない。調査対象が大学生の場合には、学年と専攻も明記する。その場合、学習者のフランス語能力のレベルは、彼ら自身が記入する社会言語学的アンケートによって補足されるであろう。とはいうものの、社会言語学的アンケートは対象となる国によって違ってくる。たとえば、PFC のアンケートでは、家庭内で使用する言語と、家庭外で使用する言語を明記するようになっているが、日本の平均的な大学生は、親のどちらかが外国籍を持たない限り、家庭で話される言語の大半は日本語である(方言を含む)と言える。日本では家庭内と家庭外における使用言語の明記はあまり必要がないと判断される。

IPFC では面接調査も行われる予定であるが、面接における学習者のフランス語レベルの評価については、彼らの学習を担当するフランス語教師等によって行われることになる。最後に、フランス語学習の深度を時系列的に分析するために、たとえば、年度始まりと年度末、あるいは授業期間内において、可能であれば同一の調査を複数回行うことが望ましい。

なお PFC と IPFC が構築する言語コーパスは、文字データと音声データから成り、個人が特定できる可能性があるため、個人情報保護の観点から、データ管理と公開条件を厳重にする必要がある。また調査協力者には、全員、その場で同意書に署名してもらうことが必須である。

1.5. IPFC-JAPON

ここでは IPFC の枠組みにおいて日本で実施される調査について簡単に説明する。日本の IPFC には以下の 5 つの特色がある。

- ① 日本人学習者に特徴的な発音の誤りと言語知識の関連性はどのようなものか、単なる発音の誤りなのか、それとも文字と関係があるのか等を調査するために、PFC の単語リスト以外に、日本語学習者用の 61 個の単語と 60 個の無意味語を用意した。
- ② フランス語能力のレベルとリエゾンの関係、およびリエゾン学習の過程を調査

するために、49 個の短文リストを用意した。

- ③ PFC では、現代フランス語の長文テキストを読んでもらい、朗読という特殊なスタイルにおける発音を調査するが、大学 1 年生にとってはテキストが難解であるため、朗読のタスクは 2 年生以上を対象に行うことにした。
- ④ PFC の調査では、方向づけされた会話 (CECRL の B1 以上のレベルであると判断された学習者)、自由会話 (CECRL の C1 以上のレベルであると判断された学習者)、学習者が選択したテーマについての会話における発音を面接調査するが、IPFC-JAPON では日本人学習者に固有のタスクを多く課したため、面接調査は現時点では行わないこととした。
- ⑤ 当初は PFC の単語リストを反復するタスクを計画していたが、上記のようにタスク全体の分量が多くなったために、単語反復タスクは 2 回目の調査で実施することになった。

IPFC では、録音対象者を大学 1 年生から 4 年生とし、各学年で少なくとも 10 名 (男女それぞれ 5 名が理想的) を録音調査することを原則としている。この点に関して IPFC-JAPON には他の調査地にはない大きな特色がある。これまでの PFC 調査は、調査者が DAT レコーダー等を持って行き、現地で一人一人の発音を録音した。これに対して IPFC-JAPON では、先述の Moodle を利用した e-learning システムの中で、学習者が自ら録音タスクを行い、録音した音声ファイル (WAVE の 20Kbps、11.025Hz、16 ビット、モノラル形式) をサーバーに送信し、サーバーが音声ファイルをタスクと学習者の情報とともに自動的にデータベース化する。別の言い方をすれば、Moodle を用いて学習者の録音データを自動的にコーパス化していくシステムを採用しているのである。¹⁷

2008 年 10 月 17 日に、IPFC-JAPON の第 1 回録音調査が東京外国語大学で実施された。¹⁸ 以下に、Moodle を用いた録音調査の概要を紹介する。

学生は、まず Moodle を起動し、アカウント作成画面から必要な情報を記入して、アカウントを作成する。次に ID とパスワードでログインし、TASK PFCJ No.1 の講義に登録する (図 1 参照)。その日に Moodle を初めて使用する学生もいたが、アカウント登

¹⁷ Moodle による e-learning 運営の詳細については、2008 年 6 月 3 日のグローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」の第 1 回研究会、『Moodle を用いたマルチメディアコーパス収集』の 3 つの報告を参照されたい。「Moodle を利用したフランス語教育の実践例」(報告者: 川口裕司)、「Moodle による書き取りタスクの実践とコーパス構築」(報告者: 松澤水戸)、「Moodle による音声録音方法のデモンストレーション」(報告者: 林俊成)。

¹⁸ PFC <http://www.el.tufts.ac.jp/moodle19/login/index.php> を参照。

録で特に問題は生じなかった。

図1 Moodle による IPFC タスク

マイコース	
TASK PFCJ No.1 (2008.10.17) 教師: DETEY SYLVAIN 教師: テスト教員 ts001 教師: 川口 裕司	Collaborative project of Global COE "Corpus-based Linguistics and Lanugage Education" and Phonologie du français contemporain (PFC). Task for the 3rd or 4th year students.
Task PFCJ No.1 (2008.10.23) 教師: テスト教員 ts001 教師: 川口 裕司 教師: 近藤 野里	Collaborative project of Global COE "Corpus-based Linguistics and Lanugage Education" and Phonologie du français contemporain (PFC). Task for the 2nd year student.

フォーラムの検索

検索オプション ?

管理

- 編集モードの開始
- 設定
- ロールの割り当て
- 評価
- グループ
- バックアップ
- リストア
- インポート
- リセット
- レポート
- 問題
- ファイル
- FR02から私を登録抹消する

コース

- TASK PFCJ No.1 (2008.10.17)
- Task PFCJ No.1 (2008.10.23)
- Task PFCJ No.1 (2008.10.??)
- Task PFCJ No.2 (....)
- 中国語学習者 学習者

2 PFC Word List No.1
PFC 単語リスト No.1

Click here ここをクリック

3 PFCJ Word List No.2
PFCJ 単語リスト No.2

Click here ここをクリック

4 PFCJ Word List No.3
PFCJ 単語リスト No.3

Click here ここをクリック

5 PFCJ Reading sentences
文の読み上げ

Click here ここをクリック

6 Reading PFC text
PFC テキストの朗読

ここをクリック Click here

7 Enquete submission.
アンケート提出

図2 IPFC-JAPON のタスクリスト

PFC Word List No.1 には、PFC の調査要項で決められた 94 個の単語がある。具体的には図3を参照されたい。学生は下にある録音ボタンを押してから、単語リストを読み上げる。読み終えて停止ボタンを押すと、録音内容が自動的に再生される。録音内容に問題がなければ送信ボタンを押す。すると録音内容がユーザー情報、時間情報等とともにサーバーに転送されるようになっている。

図3 PFC 単語リストと録音画面

コンテンツ

☐ PFC 単語調査

- ☒ PFC Word List 01
- ☐ PFC Word List 02
- ☐ PFC Word List 03
- ☐ PFC Word List 04
- ☐ PFC Word List 05
- ☐ PFC Word List 06
- ☐ PFC Word List 07
- ☐ PFC Word List 08
- ☐ PFC Word List 09

PFC Word List No.1

録音ボタンを押してから、下記の単語リストを読み上げてください。

- 01. roc
- 02. rat
- 03. jeune
- 04. mal
- 05. ras
- 06. fou à lier
- 07. des jeunets
- 08. intact
- 09. nous prendrions
- 10. fêtard

Answer

録音が終わったら、停止ボタンを押してください。再生が始まります。
再生が終わったら、送信ボタンを押してください。

● 録音 ■ 停止 || 一時停止 > 再生 準備完了 ⇒ 送信

PFCJ Word List No.2 と List No.3(図2参照)は、IPFC-JAPON に特有のタスクで、それぞれ 61 個の単語と 60 個の無意味語からなる。PFCJ Reading sentences も IPFC-JAPON に固有のもので、リエゾンの習得状況を分析するための 49 個の短文が含まれる。Reading PFC Text には朗読タスクのための長文テキストがある。テキストは 3 つのパラグラフに分けられ、まず最初に日本語の説明を読み、それを読み終えた後、録音ボタンを押してテキストを読み上げる。最後に社会言語学的なアンケート調査がある。Excel 文書の形式で、その場で回答して、ファイルを課題提出するようになっている。

PFC では全ての調査地点で単一の決められた実施要項に従って録音調査が行われた。このような統一された実施要項があることで、得られたデータの相互比較が可能になる。IPFC の録音調査においても、フランス語学習者間の比較、さらには PFC のフランス語母語話者と IPFC のフランス語学習者とのデータ比較ができるように、

IPFC の録音調査で課されるタスクは、できる限りPFCの実施要項に従うことにした。¹⁹
今後の研究プロジェクトに関しては、以下のような問題提起が可能であろう。

- ① 学習者言語データのテキスト化をどうするのか、
- ② Praat 等を用いた音声分析を行うのか、
- ③ PFC サイトへの登録と表示方法をどうするのか、
- ④ テキストデータに特殊なタグを行うのか
たとえば誤答の場合に、どのレベル(分節音、音節、語、文など)で特殊なタグ等を付記するのか、

を考える必要がある。

2. IPFC の研究

ここでは音声レベルと音韻レベルにおける諸研究のうち、筆者たちが現在最も関心を抱いている、①分節音と②リエゾンについて、PFCとの関連性を中心に述べることにする。

2.1. 分節音

2.1.1. PFC 単語リスト

PFC の推進担当者が述べているように、PFC の単語リストには、これまでに行われてきた複数の音韻調査や音声研究の成果を引き継ぐような事例が集められている。また、インフォーマントのより完全な音韻体系を記述するため、基本的に強勢位置における母音の発音が調査された。²⁰

たとえば、前舌母音[a]と後舌母音[ɑ]が観察される可能性のある単語としては、mal (4)²¹、mâle (52)、malle (46)、pâte (12)、patte (74)、ras (5)、rat (2)がリスト中にある。さらに patte – pâte (85-86)は、最小対としても調査される。リストの単語は 1-84 番までランダムに並べられている。一方、上記の 85-86 番に続いて、épais – épée、jeune – jeûne、beauté – botté、brun – brin の 4 つの最小対がリストに盛り込まれている。これによってランダムな場合と最小対の場合の実現形の違い、その関連性、さらに話し手の音韻意識を調査する。PFC の単語リストにおいて、唯一最小対が調査さ

¹⁹ タスクの最終版は現在検討中である。

²⁰ Delais-Roussarie et Durand, 2003, p.218.

²¹ ()の数字は PFC 単語リストの通し番号を表す。

れていない母音対立は、[ɔ]-[o]である。しかしながら、ランダムな単語中には *roc* (1)、*rauque* (67)、*paume* (21)、*pomme* (54)がある。

中舌母音 *schwa* を観察するために、*mal* (4) – *mâle* (52)、*roc* (1) – *rauque* (67)等の最小対がリストの中にある。また渡り音については、*miette* (63)、*mouette* (30)、*muette* (79)等の例が多数含まれる。鼻母音は *blanc* (59) – *blond* (42) – *brin* (57) – *brun* (27)がある。

単子音は様々な単語の中に散見されるが、語末の子音クラスターとして、*aspect* (38)、*infect* (22)、*intact* (8)が、語中の子音クラスターとして、*explosion* (50)、*extraordinaire* (70)、*ex-femme* (32)、*ex-mari* (53)があり、声の同化として *islamique* (17)、*slip* (64)、*socialisme* (36)、*médecin* (20)がリストに入っている。

ところで、幾つかの単語の発音に関しては、代表的なフランス語辞典である *Le Petit Robert* の 1993 年版(以下 PR)の記述は、*Martinet et Walter* の発音辞典 *Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel*, 1973 年(以下 M&W)の記述と、かなり異なっていることが知られている。こうした発音の変異を記述することは、PFC の単語リスト調査の目的の一つであると言える。

以下に、単語リストの 1 番から 10 番までの例で、記述に相違が見られるものを挙げておく。より完全な例示については、*PFC Bulletin 1*, pp.40-43 を参照のこと。

rat (2) PR [Ra], M&W [ra]10, [ra]7²²
jeune (3) PR [ʒœn], M&W [ʒœn]16, [ʒœnə]1²³
des jeunets (7) PR [deʒœnɛ], M&W *des* [de]14, [dɛ]4,
jeunets [ʒœnɛ]9, [ʒœnɛ]7, [ʒœn e]1
fêtar (10) PR [fɛtar], M&W [fɛtar]11, [fɛtar]4, [fɛːtar]1。

ところで PFC の発音調査は、厳密的な意味において Labov や Milroy が英語について行ったような社会言語学的調査とは言えない。推進担当者たちも認めているように、PFC のインフォーマントは、必ずしもその地域社会を代表していると考えられず、その規模もあまり大きくない。²⁴ PFC の主眼は、むしろ、ある程度まで地域社会と関連づけられている地理的な発音変異を記述することにあると言えるだろう。

²² M&W の辞書は 17 名の Paris type と称するインフォーマントの録音調査に基づいている。川口 (1983)を参照。

²³ PFC の発音分析が近年多くの研究対象になっている *e muet* とリエゾンの研究に貴重なデータを提供していることは注目に値する。

²⁴ Delais-Roussarie et Durand, 2003, p.217.

2.1.2. IPFC 単語リスト

IPFC 単語リストは、日本人フランス語学習者の中間言語研究を専門とするドゥテ氏が作成した。リストは 2 種類あり、第 1 のリストは現実に存在するフランス語の単語 61 語からなり、第 2 のリストは 60 個の無意味語からなる。

ところで、幾つかの国々のフランス語学習者に見られる発音の特徴については、既に先行研究のある程度の蓄積があり、その一般的な発音傾向は、たとえば Lauret (2007) pp.75-77 等に簡潔にまとめられている。ここでは Detey(2008)の IPFC-JAPON を参照しつつ、主要な調査項目について見ておく。

	語頭	語中	語末
R/L	ravage/lavage rakito/lakito	baron/ballon kirato/kilato	anti-bar/anti-bal makotar/ makotal
B/V	ballet /valet bakito/vakito	dévaler/ déballer kibato/kivato	cube/cuve makotab/ makotav
U/Y	août/ut oukito/ukito	la boulle/la bulle kidouto/kiduto	au bout/obus kotadou/ kotadu
U/EU	houleuse / heureuse oukito/eukito	c'est l'heure/c'est lourd kidouto/kideuto	un peu/un pou kotadou/ kotadeu
CC-sC	stalagmite skalapo	la pastèque laposkède	la poste malatosk
CCCC	expliqué / exprimé		

まず最初に R/L のペアである。日本人学習者が最も苦手とする区別である。²⁵ 表にあるような最小対を現実の語と無意味語で用意している。

B/V も日本人の不得意とする区別である。²⁶

U/Y では、日本人学習者は、/u/をしばしば[w]または[ə]として実現することが知られており、/y/は渡り音を前に伴って[jy]と発音する傾向がある。

U/EU の場合、日本人学習者は/œ/と/ø/をいずれも[w]と発音することが多い。

この他にも、狭い/e/を広い[ɛ]として発音する傾向があり、/o/と/ɔ/の対立が実現できないことも、しばしば指摘される。さらに、摩擦音の/ʒ/が破擦音[dʒ]になってしまうこともよく知られている。日本人学習者には、子音連続の間に母音を挿入して発音する

²⁵ 杉山、川口 (2007) p.143-144 を参照。

²⁶ 同上 p.143-144 を参照。

傾向があり、リスト中にも子音連続を含む幾つかの単語がある。

今回の IPFC 調査によって、これまで分析者の直観に頼って行われることの多かった日本人フランス語学習者の発音傾向に関する仮説は、多数の音声データを用いて、より詳細に検証されることになるだろう。

2.2. リエゾン

リエゾン研究は PFC においては初期の段階から、分節音、schwa、イントネーションとともに行われてきた。

2.2.1. PFC におけるリエゾン研究

PFC コーパス間で調査要項が一貫していることでコーパスの相互比較できる点、フランス語だけを母語とする話者と多言語併用話者との間で変異を比較して研究できる点などから、年齢、社会的背景、または地域間でのリエゾン変異の違い、フランス語学習者のリエゾンの習得における分析などが可能だろう。今までに PFC に携わる研究者によって、学会や論文で発表されてきた研究には以下のようなものがある。

H. N. Andreassen アンドレアセン(2003)の“Une contrainte de fidélité flottante pour le traitement du schwa de la liaison dans le canton de Vaud”²⁷ では、スイスのヴォー州の 12 名のインフォーマントから得た PFC コーパスについて、最適性理論の観点からリエゾンと Schwa を研究している。

P. Encrevé アンクルベ他 (2005)の中での“Liaison in French: towards an unified explanation of variation”²⁸ において、S. Wauquier-Gravelines ヴォキエ・グラヴリヌ女史は、リエゾンの種類(禁止、義務、選択的リエゾン)、アンシェヌマンなしのリエゾン、フランス語母語話者としての幼児のリエゾン習得における観察、音響的データからのリエゾン子音分析、スケルトン理論でのリエゾン子音の定義付けなど、リエゾン研究における多様な研究的視点を提示している。

2.2.2 IPFC-JAPON のリエゾン調査項目に関して

IPFC-JAPON におけるリエゾンの調査項目を決定する上で、まず 3 種類のリエゾンが考慮された。その 3 種類とは、「義務的リエゾン」、「禁止リエゾン」、「選択的リエゾン」である。しかしながら、「選択的リエゾン」はフランス語母語話者においても大きな揺れが見られ、学習者との比較は困難になると予想されるため、調査項目には加えず、調査項目では特に「禁止」と「義務」リエゾンの調査を行うことにする。調査項目に

²⁷ *Bulletins PFC* n° 3 : http://www.projet-pfc.net/?u_s=4&u_a=26を参照のこと。

²⁸ *Bulletin PFC* n°5 : http://www.projet-pfc.net/?u_s=4&u_a=19を参照のこと。

おける「義務的リエゾン」は、①PFC (*Bulletin PFC n°1*²⁹)において、Delattre (1951³⁰)により義務的にリエゾンを行う必要があるとされているコンテキストと、②PFC コーパス (Durand & Detey, 2007³¹; Durand et Lyche, 2008³²) において28893例の分析によって、安定してリエゾンされるものを選んでいる。特に、②においては、(i)冠詞 (*un, les, des, mon, son, ton, mes, tes, ses*) + 母音で始まる名詞句 (例: *les enfants, les autres enfants, mon enfant*)、(ii)後接代名詞 (*ils, elles, on, nous, vous, en*) (例: *on/[n] en/[n] avait parlé, il y en/[n] a*)、(iii)前接代名詞 (例: *De quoi parle-t/[t] on ? Comment dit/[t] on ? Encore faut/[t] il travailler*) を含むリエゾン文を作成し、調査項目とした。

「禁止リエゾン」については以下に挙げる 5 つのリエゾンが禁止されるコンテキスト³³を含む文を調査項目に加えた。

- ① リズムグループ間にまたがる場合: *Le lion// est un animal.*
- ② *h aspiré* の前: *J'aime bien les// haricots rouges.*
- ③ 接続詞 *et* の後: *Et //avec ça, ça sera tout ?*
- ④ 単数名詞の後ろに形容詞が来る場合:
J'ai rencontré un étudiant// admirable.
- ⑤ 疑問文で、主語と動詞の倒置している場合³⁴:
Vont-elles// écouter l'explication ?

以上で述べた「義務的リエゾン」と「禁止リエゾン」を含む調査を日本人フランス語学習者を対象として行うことにより、学習者のリエゾンの特徴が得られ、その結果を日本人を対象としたフランス語学習、そしてフランス語教授法に応用できる可能性がある。

²⁹ *Bulletin PFC n°1* : http://www.projet-pfc.net/?u_s=4&u_a=108を参照のこと。

³⁰ Delattre, Pierre 1951. *Principes de phonétique française à l'usage des étudiants anglo-américains*, Middlebury College.

³¹ Durand, J. & Detey, S. (2007). *Ressources pour l'apprentissage et grands corpus de français parlé : le projet PFC-EF et le cas de la liaison en français*. In N. Spanghero-Gaillard & et M. Billières (éds) *Actes de DidCog2007* [CD-ROM], Toulouse: Université de Toulouse-Le Mirail, 75-80.

³² Durand, J. & Lyche, C. (2008). French liaison in the light of corpus data. *Journal of French Language Studies* 18(1), 33-66.

³³ Léon, P.R.(2005). *Phonétisme et prononciations du français*, 4ème édition, 153-154.と Fouché, P. (1959). *Traité de prononciation française*, 2ème édition, 437-468.を参照し、作成した。

³⁴ このコンテキストでリエゾンが行われるという指摘もあるが、Léon, P.は禁止リエゾンであると述べている。

るといえる。フランス語学習年数や個人の注意度によって、リエゾンの習得度は異なることも考えられるが、学習者の特徴的な誤りを結果から把握できるであろう。たとえば、リエゾンの子音が後に続く単語の語頭でどのような音として実現するかに対する認識のように、フランス語学習者がリエゾンをどのように認識しているのかを分析し、リエゾンを学習者に教える際の注意点などを考えることができる。

また IPFC-JAPON では、社会言語学的アンケートも同時に行うため、フランス語の学習期間、学習頻度、個人の言語的背景と録音したリエゾン調査結果を照らし合わせることが可能である。

おわりに

以上に述べてきたように、IPFC プロジェクトでは、フランス語を母語としない話者を対象に、様々な学習レベルの様々な言語背景を持つ学習者のフランス語を音声的に、そして音韻論的に研究することが可能である。また調査項目に一貫した柱があることから相互比較を行うことができる。

PFC の音韻調査によって得られるフランス語は、規範化されたフランス語ではなく、実際の言語使用としてのフランス語であり、PFC は様々な地域と社会において、実際に使用されている現代フランス語の多様性に関心をもっている。一方で、IPFC は中間音韻論、主に学習者が第二言語としてフランス語を習得する際における音声特徴や音韻特徴を理論的に研究する。

これら二つの研究成果を参考にして、単一言語および多言語環境における言語変異を比較研究することが可能になるのである。第二言語としてのフランス語の習得に関しては、コーパスは調査対象となったフランス語学習者の集団に観察される特徴的な傾向を得ることができる点で、ある言語を母語とする学習者の集団を対象とする音声学・音韻論的な視点からのフランス語教授法、フランス語教育法の発展が期待できるであろう。IPFC-JAPON の調査に関しては、2008 年 10 月 17 日に東京外国語大学で実施された第 1 回録音調査の結果について、2008 年 12 月にパリで開催された PFC 学会でシルヴァン・ドゥテ氏が報告を行った([http://www.projet-pfc.net/index.php?option=com_content &view=article&id=187&Itemid=167](http://www.projet-pfc.net/index.php?option=com_content&view=article&id=187&Itemid=167) を参照)。

参考文献

ANDREASSEN, Helene N. 2003. *Une contrainte de fidélité flottante pour le traitement du schwa de la liaison dans le canton de Vaud*. PFC Bulletin 5,
http://www.projet-pfc.net/?u_s=4&u_a=19&.

- DELAIS-ROUSSARIE, Élisabeth et Jacques DURAND (éd.). 2003. *Corpus et variation en phonologie du français Méthodes et analyses*, Toulouse: Presses Universitaires du Mirail.
- DETEY, Sylvain. 2005. *Interphonologie et Représentations Orthographiques. Du rôle de l'écrit dans l'enseignement/apprentissage du français oral chez des étudiants japonais*.
- DETEY, Sylvain et Yuji KAWAGUCHI. 2008. *Interphonologie du français contemporain (IPFC)*, Version 4, 10 août 2008.
- DETEY, Sylvain. 2008. *Interphonologie du français contemporain (IPFC-JAPON)*, 17 août 2008.
- DETEY, Sylvain et Yuji KAWAGUCHI. 2008. Interphonologie du français contemporain (IPFC) : récolte automatisée des données et apprenants japonais. Communication à la Journée PFC 2008.
- DURAND, Jacques, Bernard LAKS et Chantal LYCHE. 2005. Un corpus numérisé pour la phonologie du français. In G. Williams (éd.) *La linguistique de corpus*. Rennes: Presses Universitaires de Rennes. pp. 205-217. Actes du colloque 'La linguistique de corpus', Lorient, 12-14 septembre 2002.
- DURAND, Jacques, Bernard LAKS et Chantal LYCHE (éd.). 2002. *PFC Bulletin 1*, http://www.projet-pfc.net/?u_act=download&dfile=PFC_1.pdf.
- DURAND, Jacques, Bernard LAKS et Chantal LYCHE. 2002. La phonologie du français contemporain: usages, variétés et structure. In: C. Pusch & W. Raible (eds.) *Romanistische Korpuslinguistik- Korpora und gesprochene Sprache/Romance Corpus Linguistics - Corpora and Spoken Language*. Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp. 93-106.
- DURAND, Jacques, Sylvain DETEY. 2007. Ressources pour l'apprentissage et grands corpus de français parlé : le projet PFC-EF et le cas de la liaison en français. In N. Spanghero-Gaillard & et M. Billières (éds) *Actes de DidCog2007* [CD-ROM], Toulouse: Université de Toulouse-Le Mirail, 75-80.
- DURAND, Jacques, Chantal LYCHE. (2008). French liaison in the light of corpus data. *Journal of French Language Studies* 18(1), 33-66.
- ENCREVÉ, Pierre, Tobias SCHEER, et Sophie WAUQUIER-GRAVELINES. 2005. *Liaison in French :towards an unified explanation of variation*, *PFC Bulletin 5*, http://www.projet-pfc.net/?u_s=4&u_a=19&.

- FOUCHÉ, Pierre. 1959. *Traité de prononciation française*, 2^{ème} édition, Librairie C. Klincksieck, Paris.
- KAWAGUCHI, Yuji. 2006. Usage-Based Approach to Linguistic Variation - Evidence from French and Turkish -. In Y. Kawaguchi et al. (eds.) *Spoken Language Corpus and Linguistic Informatics*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins, pp.247-267.
- LAURET, Bertrand. 2007. *Enseigner la prononciation du français: questions et outils*, Hachette, 2007.
- LÉON, P.R. 2005. *Phonétisme et prononciations du français*. 4ème édition, Edition Nathan, Paris, 1992.
- MAKINO, Takehiko. 2007. A corpus of Japanese speaker's pronunciation of American English: preliminary research. In *Proceedings of Phonetics Teaching & Learning Conference (PTLC) 2007*, UCL, University of London.
- SAITO, Hiroko and Isao UEDA. 2007. Does Accentuation of L1 Transfer to L2 prosody? -A preliminary study on Osaka and Tokyo dialect speakers' pronunciation of English. In *Proceedings of Phonetics Teaching and Learning Conference (PTLC) 2007*, UCL, University of London.
- 川口裕司 1983. 「現代フランス語の音韻体系 (1)-(6)」、『ふらんす』4-9月号、白水社.
- 川口裕司、森口恒一、斎藤純男 (編) 2004. 『言語情報学研究報告4 通言語音声研究 -音声概説・韻律分析-』、21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、東京外国語大学大学院地域文化研究科.
- 杉山香織、川口裕司 2007 「日本人フランス語学習者の単音弁別能力と発音能力ー発音教材開発に向けた基礎調査ー」、『ふらんぼー』32・33号、東京外国語大学フランス語研究室、pp.135-152.